

「百塔の街」と呼ばれるヨーロッパで最も美しい都市のひとつ古都プラハ。この街が世界に誇るオーケストラ、プラハ交響楽団が首席指揮者トマーシュ・ブラウネルと共に新年のKitaraのステージを飾ります。2024年の幕開けに、注目の顔ぶれで聴く壮麗なコンチェルト、そしてボヘミアの郷愁に彩られたスラヴの傑作交響曲に、名演への期待は高まるばかりです。

# PRAGUE SYMPHONY ORCHESTRA New Year Concert

## トマーシュ・ブラウネル (首席指揮者)

Tomáš Brauner, Chief Conductor

チェコの指揮者トマーシュ・ブラウネルは、チェコ共和国最高峰のオーケストラであるプラハ交響楽団の首席指揮者を務めている。2014?18年には、チェコ放送交響楽団の首席客演指揮者、2018?21年には、ボフスラフ・マルティヌー・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者の地位にあった。

ブラウネルは、オーケストラとオペラの指揮者として精力的に活動しておりチェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン交響楽団、プラハ放送交響楽団をはじめとするヨーロッパの主要な交響楽団と共演している。

オペラ指揮者としてのキャリアをプルゼニのJ.K.ティル劇場にて開始し、モーツァルト(ドン・ジョヴァンニ)、プッチーニ(トゥーランドット)等を指揮。プラハ国立歌劇場にはヴェルディ(オテッロ)でデビューした後、プッチーニ(ラ・ボエーム)、モーツァルト(魔笛)などを指揮した。また、リヒャルト・シュトラウス音楽祭、プラハの春国際音楽祭など重要な音楽祭にも客演している。

ブラウネルは、プラハ国立音楽院にてオーボエと指揮を学んだ。プラハ芸術アカデミーにてラドミル・エリシュカに師事し、またウィーン国立音楽大学にてウロシュ・ラヨビチのもとさらなる研鑽を積んだ。2017年、優れた芸術的貢献に対しプルゼニ市の芸術賞を受賞している。



© Petra Hajská

## プラハ交響楽団 Prague Symphony Orchestra

プラハ交響楽団は1934年の秋、指揮者のルドルフ・ペカーレクによって創立された。FOKはチェコスロヴァキア放送の生放送に定期的に出演することで名を広め、経済的に存立できる団体に成長。主たる推進者として創立以来活躍したのはヴァーツラフ・スメターチェクであり、彼は、短期間のうちに同楽団を大規模な交響楽団とし、1942年には首席指揮者に就任、その後30年間にわたって同楽団を牽引し、高い演奏水準を誇る国際的な名声を得るオーケストラへと発展させた。

1952年、プラハ市は同楽団に市を代表するオーケストラという地位を与え新しい名称は「首都プラハの交響楽団FOK」となった。1957年にはポーランド、イタリア、オーストリア、ドイツへの初の国外ツアーを行うことによって国際舞台に踊り出た。

その後イルジー・ビエロフラーヴェク、ベトル・アルトリヒテル、セルジュー・ボ



## 牛田智大 (ピアノ)

Tomoharu Ushida, Piano

2018年第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。2019年第29回出光音楽賞受賞。

1999年福島県いわき市生まれ。

2012年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサルミュージックよりCDデビュー。2015年「愛の喜び」、2016年「展覧会の絵」、2019年「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」、2022年「ショパン・リサイタル2022」は続けてレコード芸術特選盤に選ばれている。

シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管(2014年)、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管(2015年/2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)各日本公演のソリストを務めたほか、全国各地の演奏会で活躍。

その音楽性を高く評価され、2019年5月にはプレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管モスクワ公演、8月にワルシャワ、10月にはブリュッセルでのリサイタルに招かれた。2022年3月、デビュー10周年を迎えた。人気実力とも、日本の若手ピアニストを代表する一人として高い注目を集めている。



© Ariga Terasawa

ド、イルジー・コウト、ピエタリ・インキネンなどが首席指揮者を務めた。2020年9月からはトマーシュ・ブラウネルが首席指揮者となっている。

プラハ交響楽団はその歴史の中で、多くの世界的名指揮者を客演指揮者として迎えただけでなく、多彩なソリストたちとも共演。また、ヨーロッパのほぼ全ての国で演奏したのに加え、日本と米国では頻繁に演奏しており、その他にも南米、台湾、韓国、トルコ、イスラエルなどの国々を訪れている。



© Jan Kolman